

館報 教育記念館

No. 77
平成23年11月 発行



特別展「富山県小・中学校体育140年の歩み」



第9回 さんすうワールド展



思考道場・秋山仁先生スペシャル公開授業

主な内容

- ◎教育時評 富山県高等学校長協会 会長 加藤 一郎 2
- ◎元気な地域づくり活動を行う人材の育成及び支援事業 3
・平成23年度「学ぼう！ふるさと未来」支援事業
- ◎文部科学省「平成23年度採用検定教科用図書」公開展示
- ◎特別展「富山県小・中学校体育140年の歩み」 4
恒例展 「第2回児童・生徒によるものづくり展」
- ◎「きらめき未来塾」 思考道場 お笑い道場 右脳活用道場 5
「第9回さんすうワールド展 -クイズ&パズル-」
- ◎第21回郷土の先賢顕彰者 ●西川 義正 ●椎名 道三 6
●竹平 政太郎 ●継続顕彰者 7
- ◎恒例展「第8回子どもの目・自然不思議発見写真展」 8



発行所/財団法人 富山県ひとつづくり財団 富山県教育記念館 〒930-0018 富山市千歳町 1-5-1
TEL (076) 444-2000 FAX (076) 444-2001 E-mail: toyama@t-hito.or.jp http://www.t-hito.or.jp
(教育記念館会議室ご利用の場合 ☎(076) 433-2770)

発行人/富山県教育記念館 館長 伏黒 昇 印刷所/いおざき印刷株式会社



「堀川」詣で —すべては君の「知りたい」から始まる—

富山県高等学校長協会

会長 加藤 一郎

タイトルの、「堀川」とは、京都市立堀川高等学校のことである。

先日、遅ればせながら、この学校を訪問する機会があり、限られた時間ではあったが、マスコミ等でも「堀川の奇跡」と喧伝され全国から訪問者の絶えない高校の様子を直接見聞し、体感することができた。奇跡の秘密、あるいは、魅力の根源は何なのか。それを「探究」するのがねらいであった。

堀川高校の魅力の第一は、何と言っても全国初の探究科の開設とその意欲的な教育実践にある。探究科がスタートしたのは1999年のことだが、その動向は常に注目を浴びており、今年度探究科学科を開設した本県を含め多くの府県で「探究」的な学科やコースの導入が行われてきている。

今回の訪問では、人間探究科、自然探究科4クラスの全生徒が、1年半に及ぶ探究活動の成果をポスターセッション形式で発表する「探究基礎研究発表会」を参観することができた。すべてが個人研究であり、「国譲りの構造主義的解釈」「龍安寺石庭に隠された西洋技法」「〇〇系男子の研究」「恐怖を分類する」「超新星シミュレーション」等々、165に及ぶテーマと研究内容は、どれもがこちらの知的好奇心を喚起する刺激的なものであった。生徒諸君は、ここに至るたゆみない探究のプロセスをとおして「受けとる力・考える力・判断する力・表現する力」を身につけるとともに、課題の発見・設定と解決に取り組む能力を養ったことと思われる。皆、自信に満ちたいい表情をしていた。

ところで、その165のテーマを見ると、高校6教科でいえば、理科と地歴・公民分野の内容が大半を占め、純粋に数学的、英語的なものがほとんどないことに気づく。(国語はその中間。数学ゼミもあるが、数学を手段として応用したテーマばかりであった。)これは、大学における人文・社会・

自然科学という基本的な学問体系を考えれば当然のことかも知れない。自発的な探究心の向かうところがどこかを示唆しているようにも思われる。大学入試の現状の中では、高校生の「知の世界」のイメージ形成において英数国のウエイトが高いと推測されるが、大学さらには一般社会における「知の世界」とのギャップが大きいところに問題があるのではないかと改めて考えさせられた。

また、今回特別に古池教頭先生(富山県出身)に、「ビッグ・ボックス」の愛称を持つ斬新な校舎を案内していただいた。五階建ての2棟を高さ30mのガラス張り空間「アトリウム」で繋いでいるモダンな校舎には圧倒された。探究活動に専念できる別館「本能館」や400名が収容できる講堂等、充実した施設・設備が生徒たちの探究活動、文化活動をより活性化していることが実感された。一方で、アトリウムも密閉された空間で夏の暑さが耐え難いこと、体育施設が貧弱なこと等々、問題点も多いという話も聴くことができた。

荒瀬克己現堀川高校長は、全国で最もよく知られた高校長の一人である。新生堀川高校の誕生・成長物語は、著書「奇跡と呼ばれた学校—国公立大学合格者30倍のひみつ」(朝日新書)に詳しい。教諭(10年)、京都市教育委員会指導主事(3年)、教頭(5年)、校長(9年目)と立場は変わりながら、周りの人々を巻き込んで、新学科新校舎が一体となった先進的な堀川高校を創り上げ、育ててきた情熱溢れるストーリーが、明晰かつ詩的な文体で綴られている。もう一人の立役者、川浪副校長には、昨年富山県に来ていただき、3時間にわたって堀川高校のすべてを語ってもらった。聴衆は皆圧倒されていた記憶がある。

今回の訪問をとおして改めて堀川高校の改革精神、問題提起、意欲的な教育実践から学ぶことは多いと強く感じた次第である。

元気な地域づくり活動を行う人材の育成及び支援事業

平成23年度「学ぼう！ふるさと未来」支援事業 (助成対象校1校に10万円助成)

— 将来にわたって、ふるさとを愛し、ふるさとに誇りをもつ子どもの育成を願い、
地域と連携して「ふるさと学習」に取り組む学校を支援します —

4月に県教育委員会から全小学校5・6年に配布された「ふるさととやまの人物ものがたり」を通して、「ふるさと教育」が注目されたこともあり、平成17年に始まった本事業の申し込みが最高の13校になりました。その中から以下の5校を選びました。

助成校	実践テーマ
朝日町立あさひ野小学校	「風の道」森づくり — 体験学習を通して「自然との共生」を考える —
立山町立新瀬戸小学校	地域の自然・伝統・文化・人にかかわり、生き生きと自己表現できる子どもを育てる。 — 地域の特色を生かし、一人一人が輝く楽しい学校 —
富山市立大久保小学校	生き物 自然 いっぱいピオトープ
高岡市立博労小学校	ふるさとに誇りと愛着をもち、心豊かに生きる子どもの育成 — 人やものとの豊かなかかわりを通して —
高岡市立木津小学校	地域と仲よしプロジェクト — 木津を知ろう 人を知ろう —

文部科学省「平成23年度採用検定教科用図書」公開展示



文部科学省では、国民の教科書に対する関心に応え、教科書への信頼を回復するとともに、教科書検定へのより一層の理解に資するため、平成3年度から教科用図書検定規則に基づき申請図書等の公開と検定審査の概要を公表しています。本年度は6月に当館で10日間公開展示しました。(全国8箇所の会場の1つです。)



特別展

「富山県小・中学校体育140年の歩み」

4月23日(土)～5月22日(日)



研究紀要



明治初期から今日に至るまで、学校体育が、時代の要請や子供たちの体の変化とともにどのように変遷してきたのか。県内の先生方がその140年の歩みを調査研究され、結果を冊子にまとめ、パネル展示しました。

参観者の声 (60代男性)

桐山小学校の卒業生です。「逆上がり」ができなくて悔しい思いをしたこと、「けあがり」ができるようになり誇らしく昼休みに鉄棒に向かって校舎を駆けだしたことなど半世紀前の出来事を懐かしく思い出しました。

恒例展

「児童・生徒によるものづくり展」

6月18日(土)～7月10日(日)



県内の小・中学校および高等学校では、伝統的、創作的、技巧的な作品の製作に取り組んでいるところも多く、教育記念館では、その発表の場として昨年「ものづくり展」を開催しています。今年も180点の作品が寄せられました。来場者は、一つ一つの作品をじっくり鑑賞し、その作品の多彩さと技術の高さに感心していました。

きらめき未来塾（夏休み期間中）



お笑い道場
講師 三遊亭 円窓・萬窓
(落語家)



右脳活用道場
講師 ねじめ 正一
(詩人・作家)



思考道場
県内講師（池田充良、堀井祐一、
山越勳子、勝原亜希子、山本弘章）



思考道場・スペシャル公開授業
講師 秋山 仁
(数学者、東海大学教育開発研究所所長)

子どもたちの創造力や表現力、柔軟な思考力を養うことをねらい、各分野の第一人者を講師に招き、夏休み中に3つの道場を開催しました。5月末に県内各小・中学校にチラシを配布し、希望者を募集。どの講座でも、参加した子どもたちは、元気にさまざまな活動を楽しんでいました。中には来年の予約を申し入れる子もいました。確かな手応えを嬉しく思います。

恒例展

さんすうワールド展 -クイズ&パズル-

7月23日(土)~9月4日(日)



子供たちの夏休み期間中に1階ギャラリーで算数のクイズや図形パズルを掲示しました。訪れた人たちは、親子や友達同士で熱心に取り組んでいました。



第21回 郷土先賢室顕彰者紹介

畜産業に革命をもたらした 家畜人工繁殖研究の先駆者



西川 義正

(1913~1994)

西川義正は、大正2年(1913)3月、富山県上市町で醸造業を営む西田与七郎の6男として生まれた。昭和元年(1926)、旧制富山中学校入学。博物専攻だった担任の影響で旧制富山高校理科に進学。多くが医学を志す中、好きだった動物の研究を選んだ。

昭和11年(1936)、東京帝国大学農学部獣医学科を卒業、西川与一郎と養子縁組。赴任した農林省畜産試験場で、生涯のテーマとなる人工授精や繁殖生理の研究に取り組み始めた。当時、家畜人工授精に関する研究・技術はまだ揺籃期にあり、極めて原始的な方法が知られているのみで、それも普及段階にはなく、ほとんど未知の分野であった。西川は、当時の観察中心の研究とは一線を画す実験的な手法を自ら開発して研究を進めた。これらは畜産学に全く新しい分野を開拓するものであり、現代の生殖・免疫学等にも多大の影響を及ぼすものであった。

昭和27年(1952)、学術研究の国際社会への復帰が認められ、コペンハーゲンでの国際家畜繁殖会議に出席。牛精子凍結保存成功報告に触れるやその実用化研究に没頭し、独自の一貫した技術体系を確立した。それは厳選した優秀種牛の使用による体格・体型の統一化、遺伝的・不良因子・生殖器伝染病等の根絶・完全駆逐を達成するものであった。昭和32年(1957)、京都大学農学部家畜繁殖学講座の初代教授に就任、教育にも力を尽くした。昭和39年(1964)には、先駆的研究が認められ日本学士院賞を受けた。

昭和51年(1976)、退官と共に請われて帯広畜産大学学長を務め、自らの研究を通じて得た人脈を生かした海外の大学・研究機関との交流に力を注いだ。業績は世界にも認められ、昭和53年(1978)には世界畜産学会会長に就任。また昭和59年(1984)11月には、故郷に恩返しをとの思いから富山女子短期大学学長を引き受けている。平成6年(1994)2月27日、兵庫県芦屋市内の自宅近くで散歩中に交通事故に遭い急逝、享年80歳であった。

今日、日本で誕生する乳牛・肉牛は年間約220万頭、ほとんどすべて西川が開発した人工授精術によっており、優良牛である。特に、役牛しか存在していなかった昭和30年代のわずかな時期に、ほぼ完全に全国規模で肉用と牛への転換を成し得たことは、世界的に見て奇跡と言ってよい。今日の世界の畜産業は、西川の研究・技術開発によって自然的制約・非効率から解放され、近代産業として成り立ち得るにいたったと言っても過言ではない。

専門員 中村 啓志

救民の信念で新田開拓に尽くした 土木工事の鬼才



椎名 道三

(1790~1858)

椎名道三は、寛政2年(1790)中新川郡小林村(現滑川市)の十村役、宝田宗三郎の家に生まれ、同年、下新川郡大熊村(現魚津市)の椎名道山の養子となる。幼い頃より数学に才を発揮していたという。新川地方は、大きな川の流れて作られた河岸段丘が発達し、高台は地味に肥えてはいたが、米作りには決定的に水が不足し、広大な荒地地となっていた。道三は、相次ぐ飢饉に苦しむ人々を救おうと、近くの田に15歳で用水を引き、文化3年(1806)17歳の時、大熊村押場峠への引水に成功し、上押場に4町5反を開いた。これが、道三の最初の本格的な開拓であった。

文政6年(1823)23歳で椎名家を相続。道山を名乗る。文政8年(1825)、それまでも険しい地形から失敗が続く室山野開拓に着手し、これをわずか2年で完成。土木技術者としての名声が一気に高まった。天保3年(1832)に義弟に家督を譲り、安田村宇永田(現滑川市)のちの熊林村に転居し、以後、道三を名乗った。天保8年(1837)47歳で、黒部川左岸の十二貫野開拓を加賀藩より命じられる。本流との高低差の激しいこの台地への引水は、黒部峡谷の断崖絶壁を延々と切り開く難工事となる。しかし、天保10年(1839)5月に着工すると、翌年7月には早くも宇奈月谷から別所までの約20kmに通水、天保12年(1841)9月に取水口の尾ノ沼谷までの4.5kmを完成させ、のちに約5000石にも及ぶ新田開発の端緒を開いた。谷川や雪解け水の利用。余剰水やわき水を集める巻江。正確な測量をもとにした丁場と呼ばれる工区管理。用水の維持を考慮した多くの隧道。水量の多少によらない公平な分水の仕組み。サイホンの原理を利用した用水の谷越えなど、「血の一滴」とまで喩えられる水を無駄にしないための道三の知恵と技術が集約されていた。多くの困難を巧みな土木工事で克服する姿に人々は驚愕し、「鬼神の業」とまで言うものがあったという。そのほかにも、東福寺野(滑川市)、砂林開(上市町)などの開拓や舟舳野用水(富山市)の改修、加賀藩内の河川や開拓予定地の調査、立山地獄谷の測量、さらに、黒部川上流の黒薙温泉からの引湯調査などを行っている。安政4年(1857年)、湯治中に倒れ、翌年5月、熊林村の自宅で病没。享年68歳。道三がかかわった開拓地は、面積約1200町歩、草高約1万石、村数約54か村、約1400戸といわれ、今なお豊かに作物を实らせている。大きな功績にもかかわらず私財を肥やすこともなく、生涯を通して人々の暮らしを豊かにする新田開拓に尽力したその生き方は「東海道の二宮尊徳あり北陸に椎名道三あり」とも称せられ、今なお県内の郷土教育教材に数多く取り上げられている。

専門員 本村 雅宏

平成23年度も引き続き 顕彰される郷土先賢者

優れた先見性と技術革新で 地域産業の振興に尽くした人



竹平政太郎

(1908~2003)

竹平政太郎は、明治41年(1908)、西礪波郡福田村(現高岡市)に小作農の父六左衛門の長男として生まれた。小学校5年生の時、父が借金を残し突然病死したため、一家の大黒柱として農作業に励み、小学校卒業と同時に地元の銅器着色所に奉公するなど苦勞を重ねた。少年の日の政太郎は、貧しい多くの村人が豊かになる働き口が地元があればと強く願うようになった。

昭和3年(1928)20歳の時、竹平着色所として独立し、「より品質のよいものを、真に価値のあるものを」をモットーに真剣に取り組み、さばききれないほどの注文を受けるようになった。一方で、この頃すでにアルミニウム時代の到来をいち早く予想し、アルミ加工技術の研究を行っていた。昭和14年(1939)竹平製作所を設立し、アルミ铸造による鍋や釜の製造を始めた。

昭和18年(1943)戦時統合により北陸軽金属株式会社が発立され、竹平は役員となった。様々な困難を克服して、アルミ板の圧延プレス加工を導入し、北陸軽金属をアルミ製日用品分野で全国生産量の17%を占めるトップメーカーへと躍進させた。

昭和35年、三協アルミニウム工業株式会社(現三協立山アルミ(株))を設立した。「三協」の社名は、「地元、得意先、従業員」の3者の協力のもとに会社の発展を目指すことを掲げたものである。第一号商品「サンキョーなべ」が安価で品質がよいと大ヒットし、創業1年にして売り上げ3億2100円、従業員四百数十人という規模に成長した。また、昭和37年(1962)サッシ工場の建設に着手、神奈川県集合住宅団地に使用するサッシを受注し信用を高めた。昭和44年(1969)には、富山軽金属工業を設立し、地元富山でアルミ精錬から加工までを一貫生産する体制づくりに努め、昭和58年(1983)売り上げ1645億円従業員数4800人の業界トップの地位を不動のものにした。

竹平は、よりよい製品開発と10年先を読んだ経営戦略に基づいた工場建設に次々と取り組み、高岡アルミ総合産地化構想を推進し、安心して働ける職場を地域にもたらすことを成し遂げた。また、高岡商工ビルの建設や瑞龍寺伽藍の復元等多大な地域貢献をしている。これらの功績から勲2等瑞宝章、高岡市名誉市民の称号等を受章している。平成15年6月23日逝去。享年94歳。地域産業の振興に尽くした生涯であった。

専門員 北川奉秀・福田 暁

イタイイタイ病研究の父

萩野 昇 (1915~1990)

医師(萩野病院院長)。婦負郡熊野村(現・富山市福中町)萩島の医師の家に生まれる。金沢医科大学(現・金沢大学医学部)で病理学を専攻。昭和15年(1940)、卒業後、同病理学教室の研究生となる。同年10月に応召入隊。昭和21年(1946)、復員し、実家の「萩野病院」を継ぐ。身体の痛みを訴える中高年女性の患者が異常に多いのに疑問を持ち、原因と治療法の究明に取り組む。昭和31年(1956)、イタイイタイ病鉱毒説を発表し注目を浴びる。その後、小林純岡山大学教授や吉岡金市農学博士らとの共同研究により、三井金属同鉱業所の廃水中のカドミウムによる骨軟化症と断定した。政府もこれを認め、公害病と認定。

イタイイタイ病裁判では、医師の立場から患者の苦痛の実態を証言した。

イタイイタイ病患者の治療に献身的に尽くし、患者から慕われ、数々の賞を受けた。平成2年(1990)6月、多くの人に惜しまれつつ病没。享年74才であった。

突っ張りで無双を誇った名横綱

太刀山峰右衛門 (1877~1941)

太刀山こと老本彌次郎は、明治10年(1877)8月15日、婦負郡吉作村(現・富山市吉作)の茶園を持つ老本家の次男として生まれた。

明治29年(1896)、20才の徴兵検査のとき、ずば抜けた体格と腕力が新聞種となった。板垣退助らの働きかけにより、明治32年(1899)、友綱部屋に入門。四股名は、地元の「立山」にちなみ、また「常陸山(ひたちやま)」に迫れという願いを込めて、「太刀山」と命名された。

明治33年(1900)5月、幕下付け出し、初土俵で全勝。明治36年(1903)1月入幕。翌年、前頭筆頭で初優勝。明治38年(1905)5月、小結を飛び越え関脇に昇進。明治40年(1907)5月、初めて横綱常陸山に勝利するなど力を見せるも、当時の番付の壁(当時は、東西別)に阻まれたため、大関昇進まで4年を要した。

明治44年(1911)、第22代横綱に昇進。新大関の場所で2敗したが、その後引退までの8年間は3敗(43連勝後の西ノ海戦、56連勝後の栃木山戦、大正6年の大錦戦)しかしていない。大錦戦が最後の相撲となり、翌年1月引退。年寄東関を襲名。41才であった。昭和16年(1941)4月3日、逝去。享年64才であった。生家近くの吉祥寺に眠る。

呉羽小学校の相撲場「太刀山道場」は、遺族の寄付により再建されたものである。

日本的なモダニズムを開花させた建築家

吉田 鉄郎 (1894~1956)

明治27年(1894)5月18日、礪波市福野町(現・南砺市)で、業種業・郵便局を営む五島家の三男として生まれた。大正4年(1915)、建築家を目指し東京帝国大学へ進んだ。大正8年(1919)、当時の逓信省経理局管轄課に入省。時代の気風であった逓信建築に携わり、日本の近代化の流れの中で、海外建築から日本の伝統建築までを研究し尽くし、材料や構造、目的に沿った堅実で合理的な標準設計を生み出した。

モダニズム建築の巨匠ブルーノ・タウトが絶賛した東京中央郵便局(1931)は、装飾が少ない控え目な白の外観、柱と梁でないとところは全て黒の大きな窓という当時珍しいシンプルで大胆な設計であった。それは、ヨーロッパのモダニズム建築の影響を受けながらも、模倣ではない清純で真に日本的な最初の現代建築(鉄筋コンクリート造)として国際的に評価されている。

逓信省退職後は、日本大学で後進の育成に当たり、北陸銀行新潟支店などを手掛けるなど生涯を日本建築界に捧げ、昭和28年(1954)には日本建築学会賞を受賞した。昭和31年(1956)「日本中に平凡な建物をいっぱい建てたよ」と語り、62才の生涯を閉じた。

「子どもの目・自然不思議発見写真展」

9月10日(土)～10月9日(日)

自然への興味や関心の芽を育てることをねらい、子どもたちが自然界の不思議を撮影した写真の展覧会です。今年は小学校63校から261点の応募がありました。子どもたちの新鮮な感覚でとらえた作品は、大人の写真とはまた違った味わいがあります。



宇宙人みつけ！(4年)



カメラの力(6年)



はくのおさがお(1年)



がんばれアゲハチョウ(2年)



びっくり！ピンのまわりに(2年)



セミが生まれたよ！(3年)



ユリカマキリ？(3年)



初めて見たライチョウ(4年)



いろんな雲集合(5年)



あんなところに家が！？(5年)



わっ！こっちを見てる？(6年)



あ・と・が・き

財団の事業に、意欲的に参加する子どもたちがとても多く嬉しくなりました。この後も様々なことに挑戦し、自分の興味・関心や能力をさらに高めていくことを期待します。